

河西英通著『近代日本の地域思想』

小川 正人

1

本書は、北奥地域・青森県の近代史を「民衆が自己の生活空間である地域をどう認識し、どう表現したのか」という「地域思想」に焦点を合わせて再検討し、この作業を通じて「日本Ⅱ単一民族国家論の超克と国民国家論の転換をめざ」（一〇頁）そうとしたものである。本書の土台は著者の学位請求論文であり、ここ数年著者が様々な機会を通じて主張し培ってきたテーマのもと、既往の論考の補訂と新たに書き下ろした章の集成である。

日本社会を「単一」「同質」とみなす意識への批判的見解にたつた歴史研究や歴史論は少なくないが、いわゆる民族的少数者や被差別者の歴史を機軸にした研究とは異なり、マジヨリティとされた人々自身の歴史に即して解明しようとしている点に課題設定上の特色がある。また、数多の地域史から巷間の「県民性」論議に至るまで、日本列島の地域の多様性に着目する史論も少なくないと思うが、地域思想を「マジヨリティ意識の形成」（二五九頁）との関わりを意識して捉えようとしている点が本書の特徴である。

2

本文の構成は次のようである。

- 序 章 近代地域思想史の視点
- 第一章 北奥の自由民権運動
- 第二章 大同団結運動の東北的展開
- 第三章 東北青年と明治ナショナリズム
- 第四章 北奥地域像の模索
- 第五章 大正デモクラシー期の世界観と地方観
- 第六章 ファシズムと地方主義
- 第七章 翼賛運動と地方文化
- 終 章 近代地域思想史の射程

自由民権運動から一九四〇年代までという幅広い対象時期を設定し、かつ単なる通史ではなく著者の問題関心に沿った論考の集積となっている点は、全体として、「本来、独特な文化的伝統や歴史的経緯からして非マジヨリティ的存在であった北奥青森県の民衆が近代天皇制国家においてマジヨリティ意識を形成展開していった基本的背景」（三六七頁）の解明を目指そうとする方法上の特長ともなっている。それぞれの章は既往の日本史・地域史研究とも対峙するものであって、各章でそのために著者が払った努力は、脚注などに見られる先行・関連研究の摂取あるいは批判的検討の作業からもうかがえる。そして、例えば第一章では弘

前事件に対する従来の評判の整理をふまえ、「近代天皇制国家への忠誠にかかわる象徴的事件」だと主張する。また、第二章の表六、七、八のような、個々の言論・活動の狙い手の位置づけ等についての詳細な表は、実態分析のための素材の提示として重要であるとともに、そのための相当地な基礎作業の蓄積を予想させる。

著者は、自身の問題関心ともあいまって対象時期を近代に設定したが、序章第二節で指摘するような地域認識は近世史研究の成果との相互⁽²⁾摂取による地域史像の構築の可能性もうかがわせる。

3

評者は近代アイヌ教育史を専攻する者であり、著者の対象とした領域について直接にコメントする技量はない。ただ著者が設定した課題とその視点、方法に対し、⁽³⁾評者の問題関心に即して、幾つかの点を指摘しておきたい。

3-1 個々の資料からの立論にやや飛躍していると思える箇所があったり、慎重さを欠くと思える叙述がいくつか見られる。例えば序章一四頁、「下北民族にとってアイヌの生活様式は自らのものであった」という叙述について、ここで著者が一九世紀後半までの下北の民衆と北海道のアイヌの習俗との近似をいうことに異論はない。ただし、著者が引用した資料は役人の側からの観察に過ぎない。「自らのもの」というような民衆の意識に即した論証については、何らかの留保を要する筈である。また、「地域に根ざした」といった修辭や「東北の連帯と自立の思想」

といった形容（いずれも一三〇頁）についても、そうした結論そのものを否定はしないけれども、本書のごとき主題の下でこそ、なぜそのように言えるのかという点の吟味について徹底を求めたい。第六、七章で一九三〇～四〇年代の地域文化論や地域論に関する興味深い議論を紹介しておきながら、終章で「敗戦前後に最高点にまで達した青森県民の自覚と誇り」というふうに纏めた点にも違和感がある。「最高点」という形容は、その背後に或る尺度が存在することをうかがわせる。地域としての主張の鋭角さをもって「最高点」とするような尺度だとすれば、それは果たして妥当なのか。

より些細なことになるが、地域の「誇り」「自覚」といった述語は、それ自体の内容を説明することが本書の課題と関わっているのであって、だからこそ本書のような場で無前提に用いるべきではないと考える。⁽⁴⁾

3-2 本書の主題にとって重要だと考えられるが言及の乏しい論点が若干である。

序章では本書の課題にとって「民衆思想」を密接な関わりをもつ重要な要素の一つと位置づけ（八～九頁）ているが、各章での分析の対象は主として政治運動や言論人らの動向や言説である。また本書は、通説的見解において地域の伝統的習俗にとって影響が大きかったとされる、いわゆる地方改良運動の時期に関する検討を欠いているが、これにはおそらく著者なりの判断があったものと思うがゆえに、その開示が欲しかった。

3-3 評者にとってもつとも気になったのは、著者の議論の展開の仕方に関することである。このことは本書の課題設定とその射程如何とい

う問題とも関わっていない。ここでは二点を指摘しておく。

一つは、著者の叙述に、「あるべき地域思想」のようなのを措定し、その欠落あるいはそれとの距離で各時代の「地域思想」を検討する方法がうかがえることである。「大正デモクラシー期」におけるエスペラント語をめぐる「国際語論争」の意味を検討した後に「問題なのは、全国各地における「日本語」の話され方や近代における「国語」の形成過程などの肝心な点について、両者が必ずしも鋭い問い掛けを出来ずにいた点である」(二六六頁、傍点は評者)とした記述はその例である。⁽⁵⁾ここでも評者には、著者の指摘そのものに異論はないけれども、ここで解くべきは(乃至は、解くための作業を展望すべきは)、なぜそのようなになったのか、また同時代においてどのような現実的可能性を展望できるのか、という点である。本書のような叙述の仕方では、限界の指摘は容易だが、かかる問題の検討には進みにくいのではないか。

いま一つは、著者が「地域」という用語を取って用いながら、しばしば「中央」という言葉を無前提に用いたり、「真の地方」⁽⁶⁾と呼ぶに値する青森県(三三八頁、傍点は評者)といった叙述が見られることである。著者のねらいは、「日本」を「中央」とそれ以外の地域との重層構造として解析することにあるのかもしれない。だが、こうした述語からうかがえる「中央」とそれ以外との分離の仕方は、著者の地域思想の分析の周到さに比すればいささか単純な区分のように思える。かかる区分の下で、「中央」とそれ以外の人々は、それぞれにマジヨリテイの一員としての歴史認識をどのように引き受けることができるのだろうか。

4

以上、幾つかの疑問を提示してはみたが、評者にこれらの隘路を打開する手だての用意があるわけではない。⁽⁷⁾むしろ、著者の提示した諸点は、著者の課題設定と叙述が意欲的であり問題提起に富んでいることによつて惹起されたことともである。著者が本書のねらいとして掲げた事柄は、今や少なからぬ歴史研究者に共通の関心となった論点を含んでいるが、それらについて単なる指摘や概括的な主張にとどまらずに具体的な地域史研究を通じてこの議論に参画しようとしてきた著者の姿勢に相應しく、本書が多様な読者によつて検討されることを期待する。

注

(1)「近代史からの接近―多民族国家論を手がかりに」(北海道・東北史研究会編『海峡をつなぐ日本史』、三省堂、一九九三年)、「異域を見る眼―近代北方史の一視点」(地方史研究協議会編『北方史の新視座 対外政策と文化』、雄山閣、一九九四)、「近代東北の意識―青森県を例として」(渡辺信夫編『東北の歴史再発見 国際化の時代をみつめて』、河出書房新社、一九九七年)などを挙げることができる。

(2) 菅見の範囲ではあるが、浪川健治「民族文化と地域社会―「接界の地」からの視点」(岩田浩太郎編『新しい近世史 5 民衆世界と正統』、新人物往来社、一九九六年)を挙げることができる。

(3) アイヌにとつての日本近代が持った意味を論じるとき、シヤモ(和人)の民衆にとつても、日本の近代は、固有の伝統的習俗や方言を否定される歴史だったんだ」との前置きのもと、アイヌ近代史の問題の固有性如何を問われることがしばしばある。「いや、アイヌは民

族問題だから基本的に質が異なる」という対応は、誤りではないけれども、歴史研究者の議論としてはいささか天下り式であり、論証すべき課題と結論とを逆転させかねない。かかる論点と本書とが直結するとは思えないが、本書のような問題設定による歴史分析に示唆的な点があることも確かである。評者が、著者による「マジョリテイ意識」の構造分析の射程如何、に着目するのはこのためである。

(4) 「大同団結運動における」東北性(一二三〇頁)なる用語についても、かかる言葉の内容そのものを吟味することが本書の課題の筈であり、そうした作業を明示せずに述語として用いられることには違和感を覚える。

(5) これとは含んでいる問題の性格は異なるが、「戦後民主主義」下における方言否定論を紹介して「日本各地の地域言語の多様な存在から『日本語』をあるいは『日本』『日本人』の定義を確立していく立場ではない」(二四八頁)と述べたのも、論旨の差こそあれ同様の例である。

(6) なお些細な拘泥をすれば、青森県を検討する意義を述べるに際し、「一つの極点」という言い方(二〇頁)と、「(真の地方)ともいうべき」という言い方とは明らかに異質であり、後者の方が慎重さに欠ける。

(7) 強いて言えば、「中央」「自覚」「誇り」といった本書における既成の用語のいくつかを「こわす」(このことは、富山一郎氏の発言「オリエンタリズム批判は、ある意味では容易い。しかしそれを具体的な歴史叙述で実践しようとすれば言葉がこわれる」を意識している)ことだろう。かかる述語を与件とせずに地域史像を解析し構築することが評者なりの課題だと考えている。

(四六版 窓社 一九九六年一月刊 本体五〇〇〇円)

(おがわ・まさと 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員)